

## 『骨董屋』と『賭博者』

### 賭博者の悲劇

#### *The Old Curiosity Shop and The Gambler :* The Fall of the Gambler

及川 陽子

Yoko OIKAWA

何故異なる小説，異なる作品を比較するのか．その意味は明瞭である．それらの作品にある共通性，そして特殊性を見つけることによって，それらの作品を新しい視点から解釈することが可能になるからである．そしてそのことが，作品のより良い理解を生むのである．換言すると，そのような意識的な比較は作品を解釈するための多くの可能性を模索する一種の方法論となり得る．ディケンズとドストエフスキー(Fyodor Dostoevsky)に関しては，その比較の意味を完璧に説明することができる．“One thing is certain: through Dostoevsky’s reading of Dickens we find a Dickens invisible to the eye of the critic who focuses on the English author alone” (MacPike 2). 言うまでもなく，19世紀ロシアにおいてディケンズは非常に人気を博した英国作家である．ドストエフスキーの死後，何冊かのディケンズの作品が彼の書棚に残されていたことから，この偉大なロシア人作家がいかにディケンズを好み，また尊敬していたかが分かる．そして，ドストエフスキーの作品を読むことによって読者は彼の理解した，あるいは感じたディケンズをも同時に受け取ることができる．その多くは小さなエピソードや名前の類似であるが，ふたりには一貫して犯罪に対する共通姿勢があるように思われる．彼らは，共に，人間の本質をありのままに示す犯罪という社会現象に興味を持っていた．従って，彼らの作品には社会の断面を鋭く描き出す多くの犯罪，すなわち，殺人，姦通，脅迫，そして自殺や売春などまでが扱われる．19世紀という時代が，このような犯罪の増加に悩んだ時代ではあったが，とりわけ彼らの興味は深かった．コリンズ(Collins)は次のように指摘している．

“[h]is concern with crime was, however, more persistent and more serious than most men’s. Extraordinary in character as well as in literary skill, he had strong and conflicting feelings about criminals. He readily identified himself, in imagination, with their aggressive activities, but would also strongly repudiate this sympathy by extolling their adversaries, the police, and by demanding severe punishment for offenders against the law” .

(1)

これはディケンズの特徴に関する分析であるが、“literary and dramatic representations of crime” に魅了され、“the dreadful anguish over his father’s death” (Hardie 99) という重荷を背負って生きたドストエフスキーを表現する言葉としても過不足はないと思われる。彼らが犯罪作家と呼ばれ得るのは、単に彼らが多くの犯罪を作品に描き出したからではない。むしろ、彼らが終生犯罪そのものに対する関心を抱き続け、答えを模索し続けたからである。

彼らにとって、賭博というテーマは他の犯罪と同等の魅力を持っていた。それは、彼らにとっては犯罪となり得る危険性を十分に秘めた行為と思われたからである。『骨董屋』 *The Old Curiosity Shop* と『賭博者』 *The Gambler* において、彼らは賭博者の運命を鮮やかに描き出した。そこには、賭博を罪ととらえ、賭博者に相応の罰を下す作家たちの共通性がある。また、それはディケンズによるドストエフスキーの先取りの一例ともなっている。

『骨董屋』は少女ネル(Nell)の悲劇の物語である。いたいけな少女が、大人たちの思惑に振りまわされながらも健気におじいさん(Grandfather)を守り、旅をして、最後は力尽きて死んでいく。多くの人が彼女の死に涙したという、その事実がこの物語の性格を十分に説明していると言えるだろう。だがそのネルの悲劇を生んだのは、彼女を愛したおじいさんの賭博である。また、『賭博者』は全編を通じて青年アレクセイ(Alexei Ivonavich)が賭博に耽溺していく様子を、彼の恋ともう一人の賭博者おばあさん(Grandmother, Antonida Vasilievna Tarasevich [sic])との描写をからめて鮮やかに描き出している。作家たちは、賭博を一種の犯罪と位置づけ、賭博によって身を滅ぼした人間に罰を与えた。それは法律上の罰ではない。何故なら、『骨董屋』においても『賭博者』においても、誰も殺人を犯したり強盗に入ったりはしないという意味で明確な法律上の犯罪は構成されないからである<sup>1</sup>。しかしその一方で厳格な原因と結果の因果関係が存在する。すなわち、ある人間が賭博の悪癖に耽溺した時、すべては悲劇へと結びつくという事実である。ただし一般的にはいくら誰かが自らの過ちで身を滅ぼしても、それは犯

罪とは言えない。ここでこの小論における言葉の概念を確認しておこう。

ハーディは次のように言う，“two other ‘passions’ that become moral offences in excess are gambling and drunkenness” (291). この場合の“offence”は英語では crime の意味を持つ。すなわち、賭博はある種の法律を破るにあたって crime になり得る。そして crime の定義は、*OED*によれば，“an act punishable by law, as being forbidden by statute or injurious to the public welfare”である。では、ロシア語における定義を明確にするために、ドストエフスキーの小説、『罪と罰』*Crime and Punishment*を取り上げてみよう。ドストエフスキーが意図したロシア語でのこの原題は *prestupleniye i nakazaniye* である。英語ではこの *prestupleniye* を crime と訳している。しかしながら、重要な点は、この *prestupleniye* という語の定義としては、transgression, violation, そして infringement が crime に先行するという事実である。ジョーンズ(Jones)がこの点を明確に述べている。

Writers on Dostoyevsky [sic] frequently remind us that the Russian word for ‘crime’ (*prestupleniye*) means ‘transgression’ or ‘stepping over’, and that is a ‘stepping over’ of the bounds of common morality into a region where there is no distinction between good and evil that is the basic motivating force in [*Crime and Punishment*].

(68)

更に、*露露辞典*においては、*pelehod* という語は transgression を意味する *pelehod* あるいは movement を意味する *pelemesheniye* として定義される。従って、ジョーンズが説明したとおり、*pelehod* という語は基本的には法律とは直接関係がなく、単に stepping over という動きそのものを指す。しかし『罪と罰』の英訳が示すように、crime が *pelehod* という意味を持ち得るのならば、その概念は日本語の「犯罪」とは異なるので、むしろ「罪」と理解すべきだろう。この点をふまれば、賭博を「罰」に相応する「罪」ととらえることに無理はなくなる。そして、ドストエフスキー自身が恰好の例を書き残していることを付け加えておきたい。彼は一時期自ら賭博に耽溺したが、その当時、ルーレットに負けて有り金すべてを無くしてしまっては妻に手紙を書いていた。彼によれば、彼はルーレットに行っては妻が必死でかき集めた金をすってしまっていた。“I commit a crime. I lost all money that you had sent to me the other day. This is, indeed, a crime!”<sup>2</sup> 彼は *pelehod* という語を二度使っている。すなわち、彼にとって賭博とは、この世界から、自分自身と妻を苦しめる別の世界への stepping over であったのだ。もちろんこれは個人的な問題であって法律によって罰せられるべきものではない。しかし何かを stepping over したとき、人はその責任を自らとらなければならないという考え方が根底にある。そ

して『賭博者』全編に流れるその思想が、実はディケンズの『骨董屋』にも流れていることに気付く時、彼らが同じ種類の犯罪小説家であることが明らかになる。

彼らは共に犯罪者の心理状態をよく知っていた。ディケンズは幼い頃屈辱の中に過ごした時代が同時に人間観察のまたとない機会になったことをその作品において証明しているし、ドストエフスキーは自身が父を殺された被害者であり、また、銃殺刑の一步手前までいった政治犯でもあった。このような経験が、彼らに犯罪への興味をかきたて、また犯罪を描く作家としての在り方を決定づけた。

小説のテーマとしての賭博について、コーデリー (Cordery) は次のように述べる。それは、19世紀を席卷した現実の賭博熱と作家たちの社会性とを結びつけている。

[I]n the nineteenth century Dostoyevsky's own life and his story *The Gambler* (1866) are outstanding examples, but a quarter of a century earlier Dickens in his portrait of the grandfather in *The Old Curiosity Shop* 'intuitively perceived' the psychological make up of the compulsive gambler.

(13)

また、同様に彼らの心理学者としての深さと共通性を述べるのは前出のマックバイクである。

Dickens's knowledge of the mentality of the gambler is of a depth that suggests first-hand experience, for Trent's mania is described with a fullness and accuracy that look forward to Dostoyevsky's *The Gambler*, whose protagonist, although known to be a devastating self-portrait, yet shows a remarkable resemblance to Trent.

(82-3)

つまり、原因と結果の因果関係を賭博に求めた時に、ふたりの作家は同じようにそれを法律ではなく心理学的にとらえ、そしてそのstepping overにふさわしい結末を描いたと言えるのだ。

19世紀、ヨーロッパ諸国において賭博は上流階級の娯楽として始まり、すぐに人気を博すことになった。他国よりも発展の早かった英国ヴィクトリア社会では、“gambling had always been popular, but exclusive casinos and gentlemen's clubs were established in an attempt to legitimise the pursuit” (Guy 12) という。当時は社会的に金銭への執着度が増してきていたために、あらゆる階級の人々が賭博に魅せ

られた。そしてその結果、当然のように、さまざまな問題が起こってきた。賭博を純粋な娯楽ととらえて楽しむ人達がいる一方で、それをすべてと耽溺する人達もいた。後者は賭博によって精神的な打撃を受けたり、貧困にあえいだり、いのちを失ったりした。そのような社会で、心ある人々は金銭への執着と賭博の悪魔的な魅力に恐怖を感じていた(Dvorak 58)。そのため、さまざまな対策もとられた。一例として、“in 1839 a Police Act was passed which made gambling house keepers liable to six months imprisonment and a fine of up to £ 100 (Ashton 140-41)” (Cordery 59)。つまり、人々は賭博の持つ危険性にまったく無知かつ無防備だったわけではないのだ。このような状況にあって、社会問題への鋭い感覚を持っていたディケンズが賭博への興味をかきたてられたのは不思議ではない。彼自身が当事者としてではなく客観的な立場から、“the spread of the VICE of gambling” (Cordery 44)を上流階級の罪としたのも当然の成り行きではあった。『骨董屋』において、結果的にネルのいのちを縮めたおじいさんが一方で人々の同情心をかきたてるのはそのためであろう。

状況は19世紀ロシアでも大差はなかった。ただし、当時ロシアにはルーレットのできるカジノが存在しなかったため、ルーレットを楽しめるのは外国へ出かける余裕のある人々に限られていた。彼らはドイツのような地へ、療養の名目で出かけてはルーレットに耽った。その他の人々はロシア国内でカード遊びに興じるのであった。一般的に、ロシア人は賭博に耽溺しやすいとドストエフスキーは言っている。彼自身もルーレットの誘惑から抜け出すために10年もの年月をかけた compulsive gambler であったが、その経験から彼は『賭博者』の主人公であるアレクセイに言わせている。“ [t]here are two sorts of gambling, one for gentlemen and the other for plebeians — the scum plays for profit” (TG 29).<sup>3</sup> ドストエフスキーは明らかに後者であり、またディケンズや彼の作品に現れる賭博者も同様である。また、『賭博者』において、より直接的にロシア人にとっての賭博の危険性を述べるのはイギリス人アストレイ(Mr. Astley)である。アストレイは主人公に向かって言う、“I’m not blaming you, and I feel most Russians are like you or could easily become so — Roulette is mostly a Russian game”(TG 179)。ドストエフスキーは身をもってその恐ろしさを知っていたために、賭博を主題とした作品については自信を持っていた。当時の社会状況を鑑みて、ロシアでその作品が成功するのは当然だと友人に手紙を書いているほどである<sup>4</sup>。そして彼の友人でありロシアのインテリゲンツィヤの一人であったストラホフ(Nikolai Strakhov)は、家族の崩壊と人々の不幸の原因の一つとして賭博を挙げている (Lotoman 219)。おそらくロシアの人々は賭博の危険性をよく知っていたからこそ国内にカジノをつくらなかったのであろう。しかし結局は外国でのルーレットも国内でのカード遊びも禁止することができなかつたために賭博は“ the main VICE of the Russian

privileged classes”と認識され続けたのだろう(Hingley 124).

このような状況のもとでディケンズやドストエフスキーが賭博を扱う小説を書こうとした時、その筋書きはおのずと決定された。彼らは社会問題とりわけ犯罪への興味を軸に、人間心理への賭博の影響力、その過程と結末を書こうとした。重要なことは、賭博は悲劇を導く悪癖すなわち VICE になり得る、という共通認識である(Zemka 304)。それはつまり、“the tragedy is profoundly universal: it is the story of wasted ability, wasted possibilities, a wasted life”(Krag 114)ということである。しかしそれだけでは十分ではなかった。作家として、ディケンズとドストエフスキーはそれぞれが賭博をいかす主題を創作し、『骨董屋』と『賭博者』はもうひとつの共通項を持つことになった。すなわち、賭博が罪になり得るのは、それが自分以上に他人を傷つけることになる時であり、その時賭博者は良心の呵責にも苦しまなければならないのである。

『骨董屋』におけるおじいさんの賭博の動機は明らかである。彼自身が繰り返し訴えるように、ネルに金銭による幸福を約束してやりたい、というのが最初の目的であったことは疑いようがない。ただし、小説の始まりにおいてすでにハンフリー親方(Master Humphrey)による、“even that very affection was, in itself, an extraordinary contradiction”(OCS 12)という重要な指摘があることに注意したい<sup>5</sup>。彼の愛情は真摯ななかにもある種の矛盾を内包し、やがて起こりくる悲劇の予感をも垣間見せている。彼のネルへの愛情は、いつしか彼女を苦しめるものへと変貌していくのである。

賭博にあまりにも耽溺した結果、おじいさんはまだ子どものネルにとって抱えきれないほどの重荷になる。しかし、それにもかかわらず、彼は叫ぶ。

“I am no gambler, I call Heaven to witness that I never played for gain of mine, or love of play; that at every piece I staked, I whispered to myself that orphan’s name and called on Heaven to bless the venture, which it never did”.

(OCS 74)

彼の言葉と行動にパラドックスがあるのは明白である。ネルのために始めた賭博が、彼女のためになるどころか、彼女を苦しめているだけだという事実は、彼にとっては受け入れ難い現実なのである。放浪の旅に出る前は、夜中に賭博に出かけるおじいさんを見送るネルは、大人の保護なしで長い夜を過ごさなければならなかった。この事実は、賭博がおじいさんにとって“an escape from the responsibilities of adult life”(Cordery 44)であることを示す。同時に、彼はネルが逃げ出し

たはずのすべてのもの、すなわち greed や violation を体現して彼女の最大の敵となっていることも示唆している (McCarthy 21). ガレットィ (Galletti) の言葉を借りれば、おじいさんは “embodiment of malevolent curiosity” (53) なのである。賭博に魂を奪われた人間は、もはや大人、そして保護者としての役割を果たすことすらできない。

そして賭博者に降りかかる運命は悲劇となる。これこそが心理的な意味での罰と言えるであろう、最愛の孫娘の死である。彼の改悛は間に合わなかった。“— in many cases, the wretched victim has no refuge from its fury unless it be in a mad-house or the grave” (Cordery 59). ネルを失ったおじいさんは、すべてを失った人間として自らもいのちを落としてしまう。彼の悲劇は、金銭で手に入る幸福を信じただけにネルの声が聞こえなくなってしまったことにあると言えるだろう。ネルが求めていた小さな幸福、そのことに気付かずに社会的な悪である賭博を唯一の救いと考えた愚かさのために彼はすべてを失ってしまうのだ。

前述したように、ドストエフスキーの『賭博者』には賭博と恋、というふたつの主題がある。主人公アレクセイはポーリーナ (Paulina Aleksandrovna Plaskovya) との複雑な恋愛に苦しんでいる。アレクセイがポーリーナの義弟妹の家庭教師であるために、彼らの恋愛は最初から奇妙な様相を呈していた。彼は彼女に対する愛情と憎悪を抱きながらも彼女と肩を並べる必要を感じ、そのためには金銭が最も有効であると信じた。莫大な金銭こそが彼にとっての救いになると考えた。“[H]is feelings of subservience are so extreme that he fails to understand or appreciate Paulina’s character” (Knapp 104) というように、彼は愛するポーリーナの気持ちを考えることが出来なかった。この点で彼はネルの気持ちを見誤ったおじいさんと同じ出発点に立つ。そしてアレクセイは個人的に金銭を必要としたポーリーナのために始めた賭博に、彼のすべて、すなわち愛と憎しみを投影していくことになる。彼自身、ポーリーナに語る。“Money is everything [. . .] Of course I have a reason for wanting money. But I can’t very well explain it beyond saying that if I had money I’d become a man in your eyes instead of a slave” (TG 48-49). この言葉は疑いなく彼のポーリーナへの愛と賭博が彼の心の中で密接に結びついていることを示す。

しかしながら、当然のように彼のこの姿勢はポーリーナに絶望しか与えない。アレクセイは彼女の心情を一度も理解しようとはしないからである。この中編小説で一番はっきりと、そして残酷にその事実を指し示すのはまさに彼らにとって運命的な夜の出来事である。デ・グリュウ (Des Grieux) に見捨てられ、裏切られた夜、ポーリーナはアレクセイの部屋を訪ねる。令嬢が、一介の家庭教師の部

屋を訪ねるのである。それだけでも彼は彼女の愛情を知るべきであり、彼女の心情を押し量るべきであった。しかしながら、すでに賭博に耽溺していた彼にそのような思考は不可能だった。彼にとっては、そのときのポーリーナの状況はまさに千載一遇の機会にすぎなかった。彼はカジノへ走り、勝って金銭的に彼女を援助することで自分を認めてもらうために夢中でルーレットを始める<sup>6</sup>。その瞬間、彼の賭博への情熱はポーリーナへの狂おしいまでの愛情すら凌駕していた。そうでなければ、彼女の心情を読み違えることは考えられない。彼は賭博者の悲劇として愛情の真の姿を見失い、“her innermost feeling can be compensated for by money” (Frank 80) と考えたのである。この事実が彼女を深く傷つけ、そのためにヒステリー症に陥った彼女は彼の前から姿を消す。アレクセイは賭博のためにポーリーナを失ったのである。

しかしこの事実は賭博者にとって賭博は愛情に勝ることを意味しない。アレクセイにとって賭博とポーリーナへの愛は強固に結びついている。一方の存在なしに他方を語ることはもはや不可能である。ポーリーナと別れ、数々の愚行を経て身を滅ぼしたアレクセイは最終的に再びアストレイと出会う。この堅実なイギリス人はポーリーナのその後の面倒を見ながらアレクセイをも見守っていたと言う。この会話にいたって、ようやくアレクセイはポーリーナが彼を愛していたことを知る。しかし時はすでに遅かった。彼はつぎやく、“Let Paulina see that I can still become a man” (TG 180). 彼はポーリーナのためと信じて賭博を続け、賭博によって手にすべき金銭を思わずにはポーリーナとの愛を考えることができなかった。すべては愛情に始まり、賭博に終わった。しかし、同時に、もし彼を今後立ち直らせるとしたら、それはポーリーナへの愛情であることも容易に想像できる。彼にとってはそれらは表裏一体をなすが、客観的にはそれは我を失った賭博者へのある種の罰であると言えるだろう。

法律は必ずしも常に賭博及び賭博者を罰するとは限らない。しかし人間心理の上では賭博はstepping overであり、crimeの意味を内包している。従って賭博への耽溺は、ある種の罰を必要とする。『骨董屋』と『賭博者』において、ディケンズとドストエフスキーは道徳的かつ心理的な罪としての賭博を描き、複雑な愛情のパラドックスを交えて考えられる悲劇を創作した。

ヴィクトリア朝の道徳観念を持つディケンズは、賭博には死という償いしか有り得ないことを主張した。ネルへの多くの人の同情や願いを知りつつも、彼にとっては厳格なただひとつの解答しかなかった。また一方でドストエフスキーが提示した解答はやや厳格さに欠けているかもしれない。賭博者は死によってではなく、愛する者との別離と社会的な墮落という罰を受けるにとどまるからであ

る。しかし、これは作者自身の経験を考えるべきであろう。彼は現実に賭博にとらわれ、人生の約10年間を貧困と自己嫌悪に費やした。この作品ののち、ようやく賭博熱が冷め、冷静な眼を取り戻した彼だったが、当時はこのようなかすかな希望があるのみであったらう(Frank 83)。彼の主人公アレクセイがこの先再び人生を取り戻せるのか、そしてポーリーナと会えるのかは誰にも分からない。このまま賭博者として独りきりで生きていくのかもしれない。しかし、確かなことは、あまりにも賭博に熱中し、周りの人間を不幸にした者は罰を受けるという事実である。ふたりの作家は、『骨董屋』と『賭博者』における crime と punishment の意味をそのように定義し、賭博が横行する当時の社会への戒めとしたのだと言える。

## 注

本稿は2001年10月7日にバーデン・バーデンで開催された国際ドストエフスキー学会シンポジウムでの研究発表をもとに加筆・修正をしたものである。

- 1 『骨董屋』42章においておじいさんは唆されて恩人の金を盗もうとしたが、ネルの機転で犯罪者にならずにすんだ。
- 2 Dostoevsky, "To Anna Dostoevskaya." 24 May 1867. Letter 311 of [Letters] 1860-1868. 彼はこう書いている, " [..] !" (196-97)
- 3 Dostoevsky, Fyodor. *The Gambler*. Trans. Andrew R. MacAndrew. New York: Norton, 1997. 以下, この版からの引用はTGとして( )内に頁数を記す。
- 4 Dostoevsky, "To Strakhov." 18 Sept. 1863. Letter 206 of 1860-1868.
- 5 Dickens, Charles. *The Old Curiosity Shop*. *The Oxford Illustrated Dickens*. London: Oxford UP, 1960. 以下, この版からの引用はOCSとして( )内に頁数を記す。
- 6 アレクセイの独白。"I don't remember whether, during all that time, I'd thought of Paulina even once. I experienced a strange, overwhelming joy as I snatched up the notes that kept accumulating before me" (TG 146).

## 参考文献

- Collins, Philip. *Dickens and Crime*. London: Macmillan, 1962.
- Cordery, G. "The Gambling Grandfather in *The Old Curiosity Shop*." *Literature and Psychology* 33.1 (1987): 43-61.
- ..... 1860-1868
28. : , 1985.

- Dvorak, Wilfred P. "Charles Dickens's *The Old Curiosity Shop*: The Triumph of Compassion." *Papers on Language and Literature* 28.1 (1992): 52-71.
- Frank, Joseph. "The Gambler: A Study in Ethnopsychology." *Freedom and Responsibility in Russian Literature*. Eds. Elizabeth Cheresh Allen and Gary Saul Morson. Evanston, IL: Northwestern UP, 1995.
- Galletti, Chiara. "'Cusiouser and Curiouser!' *The Old Curiosity Shop* and *Little Dorrit*: A Dickens's Curiosity Story." *Acme* 45.3 (1992): 43-60.
- Guy, John. *Victorian Life*. London: Ticktock, 1997.
- Hardie, Frances Harriett Isley. "Dostoevsky as Crime Writer: The Dangerous Edge." Diss. Vanderbilt U, 1980. Ann Arbor, Mich.: UMI, c1980.
- Hingley, Ronald. *Russian Writers and Society in the Nineteenth Century*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1977. c1967.
- Jones, Malcolm V. *Dostoevsky: The Novel of Discord*. London: Paul Elek, 1976.
- Knapp, Bettina L. "Dostoevsky's Flayed Gambler, I-II." *Journal of Evolutionary Psychology* 19.1-2 (1998): 98-107. (1998): 250-62.
- Krag, Erik. *Dostoevsky: The Literary Artist*. New York: Humanities, 1976. c1962.  
 . . . [Lotoman, Yu. M.] . . . [Russian Nobles]. Trans.  
 Kuwano, Takashi. et al. : , 1994.
- McCarthy, Patrick J. "The Curious Road to Death's Nell." *Dickens Studies Annual* 20 (1991): 17-34.
- MacPike, Lorelee. *Dostoevsky's Dickens: A Study of Literary Influence*. Totowa, NJ: Barnes & Noble, 1981.
- Zemka, Sue. "From the Punchmen to Pugin's Gothics: The Broad Road to a Sentimental Death in *The Old Curiosity Shop*." *Nineteenth Century Literature* 48.3 (1993): 291-309.